

1996年と2000年の海驢島で観察した鳥類と海鳥の生息状況

今野 怜¹⁾・千嶋 淳²⁾³⁾

¹⁾ 〒080-0025 北海道帯広市西15南37-1-14

²⁾ 〒083-0001 北海道中川郡池田町字旭町2丁目13-1 道東鳥類研究所

Birds Observed and Breeding Status of Seabirds on the Todo Shima Island Hokkaido in 1996 and 2000

Satoshi KONNO¹⁾ and Jun CHISHIMA²⁾

¹⁾1-14 Minami37, Nishi15, Obihiro, Hokkaido, 080-0025 Japan

²⁾Bird Research Institute in Eastern Hokkaido, 13-1, 2, Asahimachi, Ikeda, Hokkaido, 083-0001 Japan

Abstract. In 1996 and 2000, bird observations were made on the Todo Shima Island (N40°28', E140°58') off Rebuto Island in northern Hokkaido. 24 species of birds were observed and the breeding of Japanese Cormorant *Phalacrocorax capillatus* and Slaty-backed Gull *Larus schistisagus* was confirmed and the breeding of Rhinoceros Auklet *Cerorhinca monocerata* and Large-billed Crow *Corvus macrorhynchos* was certain. Water Rail *Rallus aquaticus*, Pacific Swift *Apus pacificus*, Spectacled Guillemot *Cephus carbo*, Peregrine Falcon *Falco peregrinus* and nine Passerine species were possibly breeding. Comparing 1996 and 2000, the number and existing area of burrows of Rhinoceros Auklet was clearly increasing.

はじめに

海驢島は礼文島の北方約1.2km（北緯40°28'，東経140°58'）に位置する小島嶼で，海鳥類の繁殖地として知られるサハリンのモネロン島の南90km，同じく天売島の北120kmに位置する（図1）。海驢島に生息する鳥類については，2015年に海鳥類を対象とした調査が実施されたが（長谷部・先崎，2016；北海道海鳥保全研究会，2016），それ以前の情報はほとんどない。著者らは，1996年と2000年に海驢島に上陸し，鳥類の観察を行なった。結果はこれまで，海鳥類の生息状況を私信としてOsa & Watanuki（2002）に提供したほか，千嶋（2013，2014）で，海驢島のケイマフリ *Cephus carbo* とウトウ *Cerorhinca monocerata* について触れたのみで，詳しくは発表してこなかった。1996年と2000年当時の海鳥類の生息状況は，長谷部・先崎（2016）とは異

なる部分があり，また，海驢島の陸生鳥類に関する情報は現在でも見当たらないことから，海驢島の鳥類相を示す資料として報告する。

調査地の概要と調査方法

海驢島は周囲約4kmの台地状で，最高標高は44mである。南岸と北岸の一部に礫浜があるほかは，外周の大部分が高さ20m程の海蝕崖となっている。島の周囲には南西部にあるタタキ岩（メナシトマリ岩）をはじめとし，岩礁や独立岩がある。島の台地上は，オオヨモギ *Artemisia montana*，オオハナウド *Heracleum lanatum*，テンキグサ *Leymus mollis* などが生育する草丈50cmから80cm程の高茎草原であった。島内に河川はなく，調査当時も無人であった。

調査は1996年7月22日から24日，2000年6月24日と25日に行なった。いずれの日とも，島への

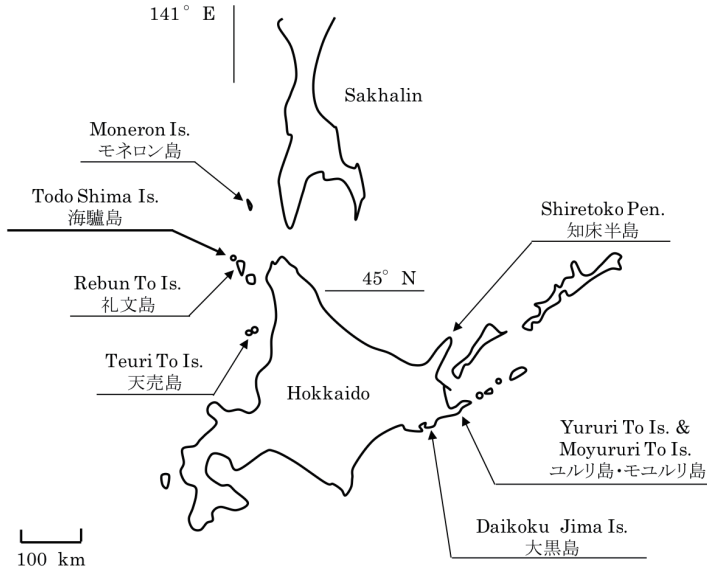


図1. 海驢島と本文に登場する各地の位置。
Fig. 1. Location of Todo Shima Island and places appearing in the text.

滞在は午前9時頃から午後2時頃まで、天候は晴れまたは曇りであった。島に上陸後、台地上の外縁近くを踏査しながら、島内と島の周囲の海上で認めた鳥類の種と個体数、観察状況を記録した。巣と巣穴を確認した種については、営巣位置とおおまかな営巣数を記録した。観察には10倍の双眼鏡と20倍から40倍の望遠鏡を用いた。台地上で認められた入口の大きさが15cm程度の土穴に関しては、1996年、2000年とも、このような穴を掘る生物はウトウ以外には認められなかったことから、すべてを本種の巣穴とした。

一部の種の島内での生息状況は、島の外周（内陸側は概ね標高20mまでを指す）、をAからJと独立岩K（タキキ岩）に区切った区域で示した（図2）。

結果と考察

海驢島では、のべ24種の鳥類が観察された（表1）。各種の生息状況は以下のとおりであった。

シノリガモ *Histrionicus histrionicus* ; 1996年に10羽以下、2000年に雄2羽と雌1羽が島近くの海上で観察された。

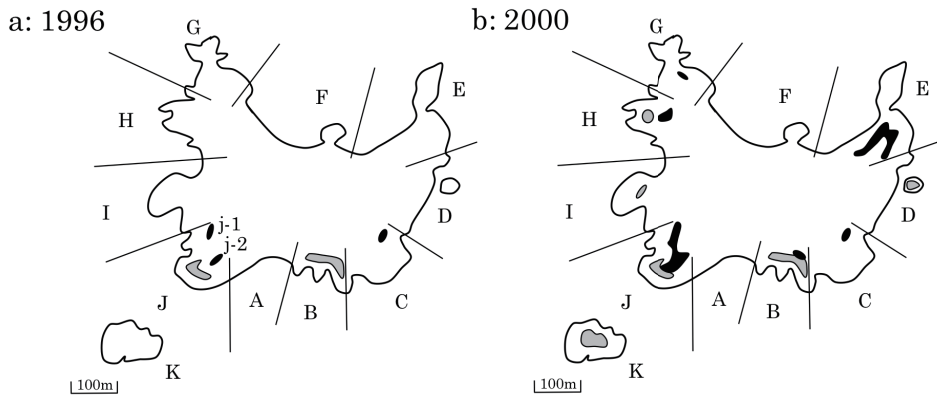


図2. 海驢島の区域割りと1996年 (a) と2000年 (b) のウミウ（灰色の範囲）とウトウ（黒色の範囲）の営巣場所。
Fig. 2. Area division of Todo Shima Island in this study and breeding sites of Japanese Cormorant: gray fill, and Rhinoceros Auklet: black fill in 1996 (a) and 2000 (b).

表1. 1996年と2000年の海驢島で観察した鳥類

Table 1. Birds observed in Todo Sima Island at 1996 and 2000, and those breeding status

種	Species	22-24, July 1996	24-25, June 2000	繁殖状況 Breeding status
シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i>	10-	3	
ハイロミズナギドリ	<i>Puffinus griseus</i>	10-		
ヒメウ	<i>Phalacrocorax pelagicus</i>		8	
ウミウ	<i>Phalacrocorax capillatus</i>	○	○	Bred
アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	1		
クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>	○	○	Possibly
アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	○	○	Possibly
ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>	50+	50-	
オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>	600 ±	250 ±	Bred
ウミガラス	<i>Uria aalge</i>	1	1	
ケイマフリ	<i>Cephus carbo</i>		2	Possibly
ウトウ	<i>Cerorhinca monocerata</i>	100+	100+	Certainly
オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>		1	
ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	1	2	Possibly
ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	○		Possibly
ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	○	○	Certainly
シマセンニユウ	<i>Locustella ochotensis</i>	○	○	Possibly
コヨシキリ	<i>Acrocephalus bistrigiceps</i>		○	Possibly
ノゴマ	<i>Luscinia calliope</i>	○		Possibly
ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	○	○	Possibly
カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>		○	Possibly
ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	○		Possibly
アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>		○	Possibly
オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>	○		Possibly

繁殖状況; Bred = 繁殖を確認した, Certainly = 巣卵や雛は未確認だが確実に繁殖していたと考えられる, Possibly = 繁殖の可能性があった, 数字は年ごとに観察した最大数, ○は個体数は記録しなかったが観察した種.

Number shown in list is maximum value of each year. ○ = observed.

ハイロミズナギドリ *Puffinus griseus*; 1996年に島近くの海上を飛ぶ個体(10羽以下)が観察された.

ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus*; 2000年に島近くの海上と, 岩礁上で合計8羽が観察された. 営巣はしていなかった.

ウミウ *Phalacrocorax capillatus*; 1996年と2000年ともに営巣していた. 1996年(図2-a, 表2)には区域Bに100巣程と区域Jに80巣程があった. 2000年(図2-b, 表2)には区域Bに100巣程, 区域H, I, Jに合計50巣程, 区域Dの離れ岩に3巣, 区域K(タタキ岩)に30巣程があった. 両年ともに最大の営巣場所は区域Bの台地縁の草付きにあり, 人が容易に接近可能な場所であった. 2000年の調査で確認した雛の大きさは成鳥の半分程度か, それ以下であった. 成鳥の数は両年とも計数しなかった.

アオサギ *Ardea cinerea*; 1996年に島の上空を飛ぶ1羽が観察された.

クイナ *Rallus aquaticus*; 1996年, 2000年ともに島の台地上の草原で確認された. 2000年には5回以

上鳴き声が聞かれた.

アマツバメ *Apus pacificus*; 1996年, 2000年ともに島の海岸近くで観察され, 群れて岩場近くを飛翔する場合があった.

ウミネコ *Larus crassirostris*; 1996年, 2000年ともに50羽程が観察された. 両年とも営巣はしていなかった.

オオセグロカモメ *Larus schistisagus*; 1996年, 2000年ともに島外縁の崖や台地の縁で営巣していた. 1996年(図2-a, 表2)には区域Fと, 区域Aを除く島の外縁全体と, 区域K(タタキ岩)で営巣していた. 2000年(図2-b, 表2)にも, 1996年と同じ区域で営巣していたが, 島の西側, 区域H, I, Jの営巣地は局所的で, 互いに連続していなかった. 成鳥の数は1996年が600羽程, 2000年は250羽程であった. 2000年の調査時の繁殖段階は卵, もしくは小さな雛であった.

ウミガラス *Uria aalge*; 1996年, 2000年ともに島近くの海上で1羽が観察された. 繁殖はしていなかった.

ケイマフリ; 2000年に島の南西部, 区域Jの海上(図

表 2. 1996 年と 2000 年の海驢島における区域ごとのウミウの巣数、オオセグロカモメの営巣状況およびウトウの巣穴数
 Table 2. Number of nests of Japanese Cormorant and burrows of Rhinoceros Auklet and breeding status of Slaty-backed Gull by area in Todo Sima Island at 1996 and 2000

区域 ¹⁾	ウミウ Japanese Cormorant		オオセグロカモメ Slaty-backed Gull		ウトウ Rhinoceros Auklet	
	1996 ²⁾	2000	1996	2000	1996	2000
A						
B	100+	100+	○	○	20+	30+
C			○	○		30+
D		3	○	○		
E			○	○		several hundreds 数百
F						
G			○	○		20+
H		10+	○	○		100+
I		10+	○	○		
J	80+	30+	○	○	j-1; 20+ j-2; 30+	several hundreds 数百
K		30+	○	○		
Total	180+	180+			70+	

¹⁾ 区域は図 2 と対応する。Areas correspond to Fig. 2.

²⁾ 調査は 7 月下旬であり一部は巣立ち後だったかもしれない。The survey carried out in late July and some may had been fledged.

³⁾ 営巣場所は連続していた。Nests were found continuously.

⁴⁾ 営巣場所は分断されていた。Nesting areas were divided.

2, 海驢島本島とタタキ岩の間) で 2 羽が観察された。2 羽は一緒におり、島のごく近くの岩場まで接近することがあった。

ウトウ; 1996 年, 2000 年ともに島近くの海上で 100 羽程を観察したほか, 2000 年には巣穴の中にある成鳥を確認した。巣穴は台地の縁で認められ, 1996 年 (図 2-a, 表 2) には区域 C と, 区域 J (2 箇所) に合計 70 巣程があった。2000 年 (図 2-b, 表 2) には, 島の南東部の営巣地は区域 C に加え区域 B でも認められ, それぞれに 30 巣程があった。区域 J の営巣地は拡大し, 数百巣の規模となっていた。このほか, 1996 年には巣穴が認められなかった島の北東部では, 区域 E に数百巣があり, おなじく北西部には, 区域 G と区域 H に合計 120 巣程があった。2000 年時点での営巣地の外観は植生に被覆されており, 広く裸地化した場所はなかった。

オジロワシ *Haliaeetus albicilla*; 2000 年に島南東部のオオセグロカモメの営巣地上空, 区域 C (図 2) で 1 羽が観察された。島内で営巣はしていなかった。

ハヤブサ *Falco peregrinus*; 1996 年には 1 羽, 2000 年には 2 羽が観察された。2000 年に観察した 2 羽は, 島の北西部, 区域 G (図 2) で観察者に対し警戒する行動をとった。

スズメ目鳥類; ハシボソガラス *Corvus corone*, ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*, シマセンニュウ *Locustella ochotensis*, コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps*, ノゴマ *Luscinia calliope*, ハクセキレイ *Motacilla alba*, カワラヒワ *Chloris sinica*, ベニマシコ *Uragus sibiricus*, アオジ *Emberiza spodocephala*, オオジュリン *Emberiza schoenichus* を確認した。ハシブトガラスは 2000 年には 2 つがいおり, 島北部の海岸では巣立ち後間もないと思われる幼鳥 1 羽が観察された。

1996 年と 2000 年の海驢島ではウミウとオオセグロカモメの繁殖を確認した。ウトウは, 卵や雛は確認できなかったが, 確認された巣穴の利用者は本種以外に該当種がなく, 当時から繁殖していたことは確実である。そのほか, クイナ, アマツバメ, ケイマフリ, ハヤブサ, ハシブトガラスの観察状況も島での繁殖を示唆するものであった。クイナは, 一般的には水辺の草むらや湿地に生息する種とされるが (中村・中村, 1995), 海驢島の台地上に湿潤な環境はない。比較的乾燥した草原をもつ小島嶼にクイナが生息する点は, ユルリ島・モユルリ島, 大黒島 (図 1) と共通しており (生物多様性センター, 2014, 2016), クイナの生息地選択を考える上で興味深い。ハシブトガラス以外のスズメ目鳥類に

関しては、巣卵や雛の確認はできなかったが、島の環境は礫浜と海蝕崖、高茎草本を主とした草原であり、観察された全ての種が繁殖し得る環境であった。

以下ではウミウ、オオセグロカモメ、ウトウの3種について、1996年と2000年、および、長谷部・先崎(2016)と北海道海鳥保全研究会(2016)による2015年の生息状況を比較する。

ウミウ；各年の調査時期は、天売島での繁殖段階(綿貫, 1996a)をあてはめると、1996年の7月下旬は繁殖後期(=巣立ち期)、2000年の6月下旬は繁殖中期(=育雛期)、2015年の調査時期である5月上旬は繁殖前期(=産卵・抱卵期)である。したがって1996年には、巣立ちによって、一部の巣が消失していた可能性があるが、育雛期に調査した2000年と同程度の巣が確認された。また、計数できる巣数が最も多いと考えられる抱卵期に調査した長谷部・先崎(2016)による2015年の営巣数は125巣であったことから、海驢島のウミウの営巣規模は1996年>2000年>2015年であったように思われる。1996年と2000年には、人が接近できる海驢島本島の台地縁に営巣地があったが、これも当時の営巣規模が大きかったことを示すものかもしれない。

オオセグロカモメ；各年の調査時期は、天売島での繁殖段階(綿貫, 1996b)をあてはめると、1996年の調査時期である7月下旬は繁殖後期(=巣立ち期)、2000年の調査時期である6月下旬は繁殖中期(=育雛期)である。1996年の計数値がより多かった点は、他地域で繁殖を終えた漂行個体が島に滞留していた可能性を否定できないが、営巣範囲の縮小は繁殖つがい数の減少を反映したもののように思われる。2015年の海驢島でのオオセグロカモメの営巣数は不明であるが、長谷部・先崎(2016)の「巣が散在した」との記述からは多数が繁殖しているようには感じられない。本種の近年の繁殖規模は、天売島、知床半島、ユルリ島、モユルリ島、大黒島(図1)ではいずれも縮小しており(生物多様性センター, 2015)、大黒島での固定調査区での営巣数は、1997年と比較して2000年には41%減少し、その後、2015年には98%減少したことが知られている(生物多様性センター, 2010, 2016)。海驢島のオオセグロカモメの営

巣数も2000年には減少に転じていたのかもしれない。

ウトウ；1996年と2000年を比較すると、2000年には、巣穴数と巣穴の分布範囲は大きく増加、拡大しており、生息数の増加は明らかであった。海驢島でのウトウの巣穴は、長谷部・先崎(2016)によれば、1989年には島の一部で確認されたのみであったが、2015年には台地縁のほぼ全域に巣穴が分布しており、利用されている巣穴は35,086巣と推定されている。また、北海道海鳥保全研究会(2016)の写真からはウトウの掘り返しや踏圧によって営巣地の一部は裸地化している様子が伺える。これらに照らすと、1996年の調査結果は1989年の状況と左程変わらないように感じられる。2000年には巣穴は明らかに増加し、営巣範囲も拡大していたが、営巣地が広く連続することはなく島内に散在しており、裸地化した場所もなかった。仮に、巣穴数を数百とした区域EとJにそれぞれ1000巣があったとしても、2000年の時点でのウトウの巣穴総数が、2015年の数には遠く及ばないことに疑いはなく、海驢島のウトウの巣穴数は2000年に差しかかる頃から急激に増加したといえよう。なお、長谷部・先崎(2016)が巣穴の利用率の推定に用いた手法は、育雛期に、巣穴の入り口に立てた割りばしの挙動を翌朝確認したものである。綿貫ら(1986)が述べている通り、この手法で利用中と判断される巣には、育雛中の巣と、雛はいないが成鳥が入り出した巣の両方が含まれる。巣内の抱卵個体や雛を確認して得た利用率とは異なる点には注意が必要であろう。

引用文献

- 千嶋淳, 2013. 北海道の海鳥1 ウミスズメ類1. NPO法人日本野鳥の会十勝支部. 帯広. 55pp.
- 千嶋淳, 2014. 北海道の海鳥2 ウミスズメ類2, アホウドリ類. NPO法人日本野鳥の会十勝支部. 帯広. 55pp.
- 長谷部真・先崎理之, 2016. 礼文島における海鳥の繁殖記録. 利尻研究, (35): 25-29.
- 北海道海鳥保全研究会, 2016. 「花の島」礼文島に海鳥?—ケイマフリ, ウトウ, ウミウの繁殖状況の解明—調査結果報告書. 北海道海鳥研究会. 豊富. 8pp.

- 中村登流・中村雅彦, 2005. 原色日本野鳥生態図鑑 水鳥編. 保育社, 大阪, 304pp.
- Osa, Y. & Y. Watanuki, 2002. Status of seabirds breeding in Hokkaido. *Journal of the Yamashina Institute for Ornithology*, (33): 107-141.
- 生物多様性センター, 2010. 平成 21 年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業 (モニタリングサイト 1000) 海鳥調査業務報告書. 生物多様性センター. 富士吉田, 111pp.
- 生物多様性センター, 2014. 平成 25 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書. 生物多様性センター. 富士吉田, 161pp.
- 生物多様性センター, 2015. 重要生態系監視地域モニタリング推進事業 (モニタリングサイト 1000) 海鳥調査第 2 期とりまとめ報告書. 生物多様性センター. 富士吉田, 87pp.
- 生物多様性センター, 2016. 平成 27 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書. 生物多様性センター. 富士吉田, 219pp.
- 綿貫豊・青塚松寿・寺沢孝毅, 1986. 天売島における海鳥の繁殖状況. *鳥*, (34): 146-149.
- 綿貫豊, 1996a. ウミウ. 日高敏隆監修, 日本鳥類大百科第 3 巻鳥類 I : 33. 平凡社, 東京.
- 綿貫豊, 1996b. オオセグロカモメ. 日高敏隆監修, 日本鳥類大百科第 3 巻鳥類 I : 113-114. 平凡社, 東京.

³⁾ 千嶋淳は、本報文投稿後の 2018 年 11 月 27 日に死去した。著者の一方である今野は故人と 20 年来の友であったが、彼の野鳥への思いにはいつも驚かされた。文中でも一部を引用した「北海道の海鳥」シリーズをはじめとする著作物は、今後も野鳥を思う人を啓発し続けるであろう。心より哀悼の意を表します。(2018 年 12 月 3 日, 今野怜)